

## 研究ノート

## 『枕草子』の温泉の謎、『ななくりの湯』を訪ねて

安 達 清 治

## はじめに

『枕草子』の中で温泉の記述は私にとって謎であった。

「湯は、ななくりの湯、玉造の湯、有馬の湯」（能因系本 117 段）とあり、玉造と有馬の湯は特定できるが、「ななくりの湯」は私にとって謎であった。

謎の一つが『枕草子』の原本は発見されていず、写本があるが 4 系列もあり、その一つの「能因系本」のみに記載されている温泉なのである。この写本は学習院大学蔵で三条家旧蔵の「能因が本」と呼ばれ、この本を底本として笠間書房からこのほど発刊された。「能因系本」そのものの出版がこれまでほとんどなく、私の手には入らなかったのがやっと手に入った。

この本の中に「湯は、ななくりの湯、有馬の湯、玉造の湯」（117 段）とあり、「ななくりの湯」はこれまで知られていない謎であった。全国温泉事典＝実業の日本社には「榊原温泉は、七栗の湯と呼ばれ枕草子にその名が見える」と、榊原温泉がななくりの湯であるとしている。日本地名事典＝三省堂では、「ななくりの湯は、現在の榊原温泉である。七栗の湯、七久里の湯とも綴っている」といづれも「ななくりの湯」は榊原温泉だと指摘しているのが通説である。なぜ「ななくりの湯」が榊原温泉（三重県）に名称が変更になったのかも謎であった。

清少納言さんが、なぜ三つの湯を上げ、ななくりの湯へは誰と、いつごろ訪ねたか、もちろん解説は一切ない。そこで「榊原温泉」を訪ねてみたいという私の好奇心が訪ねさせた理由であった。『枕草子』を片手に、彼女が好きであった季節も初夏に、思いを寄せて訪ねた。

「五月ばかりなどに山里にありく、いとをかし。草も水もいと青く見え渡りたるに、…いとをかし。」（三卷本系 223 段）と夏の季節に山里に行けば、水も、青青し草木もすばらしいと感じている。「節は 5 月にしくはなし」（能因系本 46 段）と、季節は絶対に 5 月がすばらしいという。こだわりの季節である初夏のころに出かけたのではないか。榊原温泉への旅では、清少納言さんと同様の初夏の季節に感傷に浸ってみたいと思った。

さらに、京の都から榊原温泉へは、どのようなルートで訪ねたのであろうか。鈴鹿山脈のある鈴鹿の森から伊勢に出てくるコースと、奈良から伊勢を結ぶ初瀬街道経由で訪ねたコースの

二つが予想される。初瀬街道はまた、私の知らない街道の一つであり、道路状態など訪ねてみないと分からないと思った。特に連れの者もいたことと思うが女性の旅であり、どちらのコースをとっていても安全性等からも女性の旅は大変厳しかったに違いないなかった。

もちろん、私はこの温泉地を訪ねたことがなく、イメージでは清純な温泉地であろうと予想して訪ねた。

## 117 段「湯」の考察

また、「湯は」（117 段＝三卷本系）では、三つの温泉を紹介しているがこれらの湯は、古い歌からの連想であると注釈にある。有馬温泉では「あい思わぬ人を思うぞ病なる なにか有馬の湯へも行くべき」（古今和歌集 6 帖）。榊原温泉は、「一志なるななくりの湯も 君がため恋しやまずと聞くは物憂し」（夫木妙）。温泉をテーマの作品である。しかし、なぜか玉造温泉には引用歌はない。

三卷本の解説には、有馬温泉と、榊原温泉は引用歌によっているとしているが、なぜ玉造温泉には引用歌がないのかも不思議である。解説者も三つの湯の根拠がわからないのではあるまいか。

玉造温泉は、笠間書房の能因本系「枕草子」では、注釈には宮城県玉造郡鳴子町の玉造温泉としている。しかし玉造温泉は鳥根県にも玉造温泉があり、鳥根県八束郡玉湯町玉造の温泉である。私は温泉に出向いたとしたら、玉造温泉は歴史的にも距離的に見ても（関西からの距離は）鳥根県の玉造温泉であろうと推測している。

しかし清少納言の前夫の則光氏は東国の遠江の国府になって赴任しており、則光氏から宮城県の玉造温泉の評判を聞いたかもしれない。

しかし「能因本」の 387 段〔「又一本」=別の本という意味〕には、さらに「出で湯はななくりの湯、有馬の湯。那須の湯。つかさの湯。ともの湯」という五つの湯が紹介されている。この項目も三段系の『枕草子』には掲載されていないのである。しかも、つかさの湯と、ともの湯はどこ温泉なのか不詳である。

こうしたことから、三卷本の 117 段は、後世に付け加えられたのでないかという説も浮上しているのである。

### ななくりの湯へ

大阪から近鉄線で伊勢駅行きの特急で 1 時間 5 分、トンネルを 4 つほど抜けると榊原温泉口

駅（三重県）に着いた。

トンネルを抜けるごとに5月も終わりに近いのにひんやりとしてくる。山間の駅である。しかも駅前には家は一軒もないさびしい駅である。そこから旅館のマイクロバスで20分、突然、歩道がある町並のある小さな町に入ると、目指す旅館・清少納言の看板がすぐに目に入る。

旅館・清少納言を選んだのは、駅にある温泉案内の中から飛び込みの予約による宿泊なのである。ネーミングが私の好みにぴったりであり、ただそれだけで電話で選んだのである。

湯の瀬川を背にした旅館は部屋数が32の旅館である。露天風呂はないが大きな湯層がいい。‘美人の湯’とキャッチフレーズが出ていたが、湯は澄んでおり、ぬるっとしている。大きな窓からは山が見え新緑の木々がすがすがしい。この川のカジカの声がなんとも自然を感じさせる。しかも夜中ににわか雨かなと思いきや目が覚めて窓に寄ったら、湯の瀬川のせせらぎの音であった。

ひと風呂楽しんでから旅館の裏側から見えるお寺さんまで散策した。道の途中にかわいいお地蔵さんがあり思わず見とれてしまう。農家の庭からの焚火の煙が日本の元風景を見てるようである。山の新緑はきれいである。清少納言さんが尋ねるとすれば、やはり5月が素晴らしいと思った。

今回の旅は、突然の学校の休校があり思い立ったものである。静養と温めていた清少納言の謎に近づくことであり、ななくりの湯の名称の謎も知りたかったからである。散歩の途中に犬を散歩させている（黒犬ばかり三頭も一緒だった）土地の古老と出会い、さっそくなぜななくりの湯が榊原温泉になったのかと質問した。

「この町の中に地名としてななくりがあります」と東の方をゆびさした。「榊原もこの地の地名としてあり、しかし、いつ頃からか榊原温泉がななくりの湯を席卷した」という。榊原温泉の由来は、榊が自生しており「榊が原」とも呼ばれていたからだという。榊原の由来は正しいようだ。しかし「ななくりの湯」の開湯伝説はない。源泉が昔からあるのだという。この榊は神宮の祭祀に使用されていたという。いつごろから榊原温泉に名称が変わったかは‘私にはわからない’ということであった。

この榊原温泉は初瀬街道（奈良から伊勢間）があり、江戸時代には善男善女が参詣の途中に立ちよって栄えたという。「湯ごり」の湯であり、参詣のためのお清めの湯であったという。きっとそのころから榊原温泉が優勢になったのだらうと思う。榊原温泉もネーミングはいい、今日では温泉では、ななくりの湯－榊原温泉と二つを併記している。旅館の仲居さんによれば、「ななくりの湯を言うのは土地の人で、観光客には榊原が通っている」という。

旅館にあった土産品には、「しるしあれば 七栗の湯をななめぐり 恋の病のみそぎにやせ

ん」(室町時代の歌の作品)があり、室町時代ではななくりの湯の名称が使われていたことが明らかである。お伊勢参りが本格化した江戸時代からは‘榊原温泉’として使われたのだろう。

翌日は時間があり、郷土資料館に車を寄せた。縄文時代からこの地に人が住み、奈良時代と平安時代には皇族が訪れていると古文書が残されている。清少納言さんが訪れても不思議はない温泉地なのである。

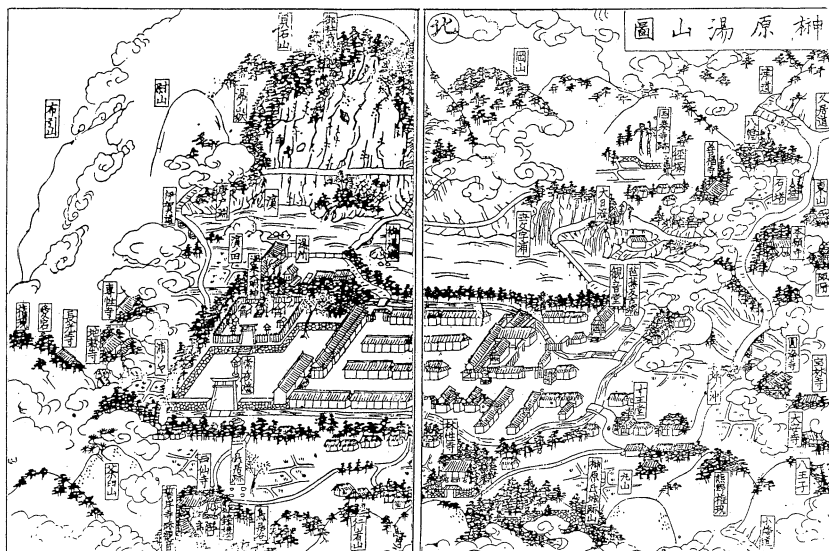
江戸時代に伊勢神宮の参詣者で初瀬街道の沿線がブレイクし宿場町として温泉地として栄えている。そして私の宿泊した旅館・清少納言は築50年という。第2のバブル期に大型化したのが今日ではもはや昔の輝きはない。どのホテルもつくりは団体使用であり、このため榊原温泉郷も時代の波でにぎわいはなく、今年も旅館が1軒倒産したという。観光客は伊勢志摩へ行くのだろう、そういえば榊原温泉口駅で下車したのは、私一人と土地の人らしい親子が2人のみであった。

京都から清少納言さんは、榊原温泉へどのように訪れたのだろうか。

「鈴鹿山脈を越えて伊勢経由よりは、平たんな道筋になる奈良からの初瀬街道経由でないですか」と仲居さんは言う。現実的に初瀬街道は江戸時代に整備ができたといえ(道筋に常夜燈が残っている)山越えはないはずである。榊原温泉の背景にはなだらかな青山高原が広がっている。女性旅が利用するにはこの街道であろう。と推測できる。

もちろん春の桜、秋の紅葉の季節は素敵であるというが、初夏も木々の命の息吹が感じられ

江戸時代の榊原温泉の湯治場を描いた木版画(温泉来由記より)



るし、高原地帯でありさわやかなのである。日中にはホオジロやヤマバトの声が聞こえるし、カジカの声もなかなか風情が感じられる。「カワセミが見れますよ」と仲居さんがいう。自然がいまも残されている。

「五月ばかりなどに山里にありく、いとをかし。草葉も水もいとあをく見えたるに、上はつれなくて草生い茂りたるを、長々とただぎまに行けば、下はえならざるける水の、深くあらねど、人などの歩むにはしりあがりたる、いとをかし。」(223 段) 京都の伊賀などの周辺地域であろうが、山里の散策は新緑の季節を迎えており、最もコントラストが強く、しかも生命の息吹が感じられるためだ。しかも小川のせせらぎがあつて清少納言さんの気性にあつたぴったりの季節であろう。

夏はどうですかと、仲居さんに尋ねたら答えが返ってきた。「夏は閑散期です」という。現代人にとっては自然のみを感じることは苦手なのであろう。この温泉地にはスポーツの施設はない。なにせ、榊原温泉は自然のみがたっぷりの温泉地なのである。平安時代からの自然であろう。

翌日帰る時間前に散策で初瀬川の橋を三つほど渡ってみた。旅館・清少納言の裏の大きな橋を除くと、大きな石づたいの小さな橋ばかりであり、清流の流れが気持ちいい。ほっとする自然がある。仲居さんが荷物を持ちながら「バスの時間ですよ」の声でなな栗の湯を後にした。

## 日本人の季節感と美意識

清少納言は『枕草子』で四季それぞれの季節がすばらしいとしている。

### 春の季節

「春は曙が素敵。だんだん白くなっていく山の雲が明るくなっていく」

「紫っぽい雲がその下にたなびいているのはすばらしい」

### 夏の季節

「夏は夜が素敵。月のころはすばらしい。」

「ホタルが飛び交っているのもすばらしい。」

### 秋の季節

「秋は夕暮れが素敵。夕日が差して山の端が

すごく近くなっているところはすばらしい」

### 冬の季節

「冬は早朝が素敵。雪が降っているのはすばらしい。」

「霜が白くなっているのもすばらしい。」(枕草子 第1段)

大岡信著による「第四折々のうた」(岩波新書)がある。

短歌、俳句、川柳、現代史からのうたを、春のうた、夏のうた、秋のうた、冬のうたの四編で構成し、それぞれの季節の歌を集めて解説している。

たとえば

春は、梅のかや 没日に顔を消されつつ (小檜山繁子)

夏は、男の子は 裸にするとつかまらず (誹風柳多留)

秋は、草の戸や つたの葉括れし日の移り (室生犀星)

冬は、ひよどりの それきり鳴かず雪の暮 (臼田あろう)

日本人にとっての四季はそれぞれの季節がすばらしく、特に自然はすばらしいと清少納言は『枕草子』で述べており、日本人の四季に対する美意識がある。現代の日本人にとっては、こうした美意識を感じる自然は、温泉地であろう。温泉地も、特に外湯がある山間の温泉地がいい。

こうした温泉地なら、春は、さくらが咲き、夏の新緑、秋なら紅葉、冬なら雪景色である。かつての温泉地はほとんどがこうした自然の中にあつたに違いない。しかも、近代ではほとんどの温泉地が四季の自然を感じることができたであろう。

近代の作家が、温泉地を舞台にして作品を創つたのもこうした自然を背景にしたことと、湯治場時代から、休養としての温泉地の利用は宿泊施設の充実、女将の“おもてなし”もあつたから発表したのであろう。

#### 資料一覧

『枕草子』能因系本 笠間書院 松尾聡・永井和子 訳・注 08年3月

『枕草子』三巻本系(上巻、下巻) 角川文庫 石田譲治 訳・注 89年11月

『春は、あけぼの』創知社 秦恒平著 84年1月

『近代の作家と温泉』近代文藝社 安達清治著 09年11月

日本地名事典 三省堂 98年12月

全国温泉事典 実業の日本 72年6月